

## §5. 連立1次方程式

$A$  を  $m \times n$  行列,  $b$  を  $m$  次の列ベクトルとし, 連立1次方程式

$$Ax = b \quad (*)$$

を考えよう.  $(*)$  の解が存在するかどうか, 更に解が一意的かどうかは係数行列  $A$  および拡大係数行列  $(A|b)$  の階数の言葉で次のように述べることができる.

**定理**  $(*)$  の解が存在するための必要十分条件は

$$\text{rank}(A|b) = \text{rank } A.$$

$(*)$  の解が一意的に存在するための必要十分条件は

$$\text{rank}(A|b) = \text{rank } A = n.$$

**証明** まず,  $(A|b)$  の行に関する基本変形を行い, 必要ならば変数の入れ替えに相当する列の入れ替えを行うと,  $(A|b)$  は

$$\left( \begin{array}{c|c|c} E_r & B & c \\ \hline O & O & d \end{array} \right)$$

と変形することができる. ただし,  $r = \text{rank } A$  で,  $B$  は  $r \times (n-r)$  行列,  $c$  は  $r$  次の列ベクトル,  $d$  は  $(m-r)$  次の列ベクトル.

よって,

$$\text{rank}(A|b) = \text{rank } A, \text{rank } A + 1.$$

$\text{rank}(A|b) = \text{rank } A + 1$  のとき, 上の行列は更に行に関する基本変形を行うと,

$$\left( \begin{array}{c|c|c} E_r & B' & 0 \\ \hline & & 1 \\ & & \vdots \\ O & O & 0 \end{array} \right)$$

と変形することができる.

したがって,  $(*)$  の解は存在しない.

$\text{rank}(A|b) = \text{rank } A$  のときは  $d = 0$  となる.

したがって,  $(*)$  の解は存在する.

更に,  $(*)$  の解が一意的となるのは  $(E_r|B)$  の部分が単位行列となるとき, すなわち  $r = n$  のとき.

□

具体的な例を見てみよう.

**例** 連立1次方程式

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 \\ 2 & 3 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 6 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

を考える.

拡大係数行列の行に関する基本変形を行うと、

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 & | & 1 \\ 2 & 3 & 0 & 1 & | & 0 \\ 0 & 1 & 6 & -1 & | & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} - \text{第1行} \times 2} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 & | & 1 \\ 0 & -1 & -6 & 1 & | & -2 \\ 0 & 1 & 6 & -1 & | & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} + \text{第3行}} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 & | & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & | & -1 \\ 0 & 1 & 6 & -1 & | & 1 \end{pmatrix}.$$

ここで、第2行に注目すると、解は存在しないことが分かる。  
また、係数行列の階数は2で、拡大係数行列の階数は3である。

**例** 連立1次方程式

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 \\ 2 & 3 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 6 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix}$$

を考える。

拡大係数行列の行に関する基本変形を行うと、

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 & | & 1 \\ 2 & 3 & 0 & 1 & | & 0 \\ 0 & 1 & 6 & -1 & | & 2 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} - \text{第1行} \times 2} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 0 & | & 1 \\ 0 & -1 & -6 & 1 & | & -2 \\ 0 & 1 & 6 & -1 & | & 2 \end{pmatrix} \xrightarrow{\begin{matrix} \text{第1行} - \text{第3行} \times 2 \\ \text{第2行} + \text{第3行} \end{matrix}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & -9 & 2 & | & -3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & | & 0 \\ 0 & 1 & 6 & -1 & | & 2 \end{pmatrix}.$$

よって、係数行列および拡大係数行列の階数はともに2。

また、

$$\begin{cases} x_1 - 9x_3 + 2x_4 = -3, \\ x_2 + 6x_3 - x_4 = 2 \end{cases}$$

だから、

$$x_1 = -3 + 9c_1 - 2c_2, \quad x_2 = 2 - 6c_1 + c_2, \quad x_3 = c_1, \quad x_4 = c_2.$$

ただし、 $c_1, c_2$  は任意の定数。

**注意** 上の例の計算からも分かるように、連立1次方程式(\*)において、

$$\text{rank}(A|b) = \text{rank} A < n$$

のとき、解は  $(n - \text{rank} A)$  個の任意の定数を用いて表される。

(\*)において、 $b = 0$  の場合、すなわち

$$Ax = 0 \tag{**}$$

を考えよう。(\*\*)は斉次形または同次形であるという。

このとき、

$$\text{rank}(A|0) = \text{rank} A$$

だから、上の定理より、(\*\*)の解は存在する。

(\*\*)を解く場合は係数行列の行に関する基本変形を行えばよいが、明らかに $x = 0$ は解である。 $x = 0$ を自明な解とよぶ。

**定理** 次の(1), (2)が成り立つ。

(1) (\*\*)の解が自明な解のみであるための必要十分条件は

$$\text{rank } A = n.$$

(2)  $m < n$ ならば、(\*\*)の自明でない解が存在する。

**証明** (1): 上の定理より、明らか。

(2): 階数の性質と仮定より、

$$\begin{aligned} \text{rank } A &\leq m \\ &< n. \end{aligned}$$

よって、(1)より、(\*\*)の自明でない解が存在する。□

次に示すように、(\*)の解が1つ見つければ、その他のすべての解は対応する同次形の連立1次方程式(\*\*)の解を、見つけた解に加えることによって得られる。この事実は微分方程式への応用を考える際に重要である。

**定理**  $x_0$ が(\*)の1つの解ならば、(\*)のすべての解は(\*\*)の解 $x_1$ を用いて、 $x_0 + x_1$ と表される。

**証明** まず、 $x_1$ を(\*\*)の解とすると、

$$\begin{aligned} A(x_0 + x_1) &= Ax_0 + Ax_1 \\ &= b + 0 \\ &= b. \end{aligned}$$

よって、 $x_0 + x_1$ は(\*)の解。

逆に、 $x$ を(\*)の解とすると、

$$\begin{aligned} A(x - x_0) &= Ax - Ax_0 \\ &= b - b \\ &= 0. \end{aligned}$$

よって、 $x - x_0$ は(\*\*)の解だから、これを $x_1$ とおくと、

$$x = x_0 + x_1.$$

□

**例** 上の2つめの例において、解は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -3 \\ 2 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + c_1 \begin{pmatrix} 9 \\ -6 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + c_2 \begin{pmatrix} -2 \\ 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と表されるが、右辺の第2項、第3項が対応する同次形の連立1次方程式の解である。

## 問題5

1. 掃き出し法を用いることにより, 次の(1)~(6)の連立1次方程式の解が存在するかどうかを調べ, 解が存在する場合は解を求めよ.

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \\ 5 & 6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}.$$

$$(2) \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \\ 5 & 6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

$$(3) \begin{pmatrix} 1 & 1 & -2 \\ 1 & -2 & 1 \\ -2 & 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 3 \\ -3 \end{pmatrix}.$$

$$(4) \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \\ 0 & 1 & 2 & 7 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

$$(5) \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \\ 0 & 1 & 2 & 7 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}.$$

$$(6) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 3 \\ 1 & 0 & 3 & 2 \\ 2 & 3 & 0 & 1 \\ 3 & 2 & 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}.$$

## 問題5の解答

1. (1) 拡大係数行列の行に関する基本変形を行うと,

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 3 & 4 & 0 \\ 5 & 6 & 0 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第2行} - \text{第1行} \times 3 \\ \text{第3行} - \text{第1行} \times 5}} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 0 & -2 & -3 \\ 0 & -4 & -5 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第3行} + \text{第2行} \times (-2)} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 0 & -2 & -3 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}.$$

よって, 解は存在しない.

(2) 拡大係数行列の行に関する基本変形を行うと,

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 3 & 4 & 1 \\ 5 & 6 & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第2行} - \text{第1行} \times 3 \\ \text{第3行} - \text{第1行} \times 5}} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 0 & -2 & -2 \\ 0 & -4 & -4 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} \times \left(-\frac{1}{2}\right)} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 0 & -4 & -4 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第1行} - \text{第2行} \times 2 \\ \text{第3行} + \text{第2行} \times 4}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}.$$

よって,

$$x_1 = -1, x_2 = 1.$$

(3) 拡大係数行列の行に関する基本変形を行うと,

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & -2 & 0 \\ 1 & -2 & 1 & 3 \\ -2 & 1 & 1 & -3 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第2行} - \text{第1行} \\ \text{第3行} + \text{第1行} \times 2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 & -2 & 0 \\ 0 & -3 & 3 & 3 \\ 0 & 3 & -3 & -3 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} \times \left(-\frac{1}{3}\right)} \begin{pmatrix} 1 & 1 & -2 & 0 \\ 0 & 1 & -1 & -1 \\ 0 & 3 & -3 & -3 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第1行} - \text{第2行} \\ \text{第3行} - \text{第2行} \times 3}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 1 \\ 0 & 1 & -1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}.$$

よって,

$$\begin{cases} x_1 - x_3 = 1, \\ x_2 - x_3 = -1 \end{cases}$$

だから,

$$x_1 = 1 + c, x_2 = -1 + c, x_3 = c.$$

ただし,  $c$  は任意の定数.

(4) 拡大係数行列の行に関する基本変形を行うと,

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 1 \\ 2 & 3 & 4 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 7 & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} - \text{第1行} \times 2} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 1 \\ 0 & -1 & -2 & -7 & -2 \\ 0 & 1 & 2 & 7 & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第2行} + \text{第3行}} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 2 & 7 & 1 \end{pmatrix}.$$

よって、解は存在しない。

(5) 係数行列の行に関する基本変形を行うと、

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \\ 0 & 1 & 2 & 7 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第2行}-\text{第1行}\times 2 \\ \text{第4行}-\text{第2行}\times 3}} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 0 & -1 & -2 & -7 \\ 0 & 1 & 2 & 7 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第1行}-\text{第3行}\times 2 \\ \text{第2行}+\text{第3行}}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 7 \end{pmatrix}.$$

よって、

$$\begin{cases} x_1 - x_3 - 10x_4 = 0, \\ x_2 + 2x_3 + 7x_4 = 0 \end{cases}$$

だから、

$$x_1 = c_1 + 10c_2, \quad x_2 = -2c_1 - 7c_2, \quad x_3 = c_1, \quad x_4 = c_2.$$

ただし、 $c_1, c_2$  は任意の定数。

(6) 係数行列の行に関する基本変形を行うと、

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 3 \\ 1 & 0 & 3 & 2 \\ 2 & 3 & 0 & 1 \\ 3 & 2 & 1 & 0 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第3行}-\text{第2行}\times 2 \\ \text{第4行}-\text{第2行}\times 3}} \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 3 \\ 1 & 0 & 3 & 2 \\ 0 & 3 & -6 & -3 \\ 0 & 2 & -8 & -6 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{第1行と第2行の入れ替え}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 3 & 2 \\ 0 & 1 & 2 & 3 \\ 0 & 3 & -6 & -3 \\ 0 & 2 & -8 & -6 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第3行}-\text{第2行}\times 3 \\ \text{第4行}-\text{第2行}\times 2}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 3 & 2 \\ 0 & 1 & 2 & 3 \\ 0 & 0 & -12 & -12 \\ 0 & 0 & -12 & -12 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第4行}+\text{第3行} \\ \text{第3行}\times\left(-\frac{1}{12}\right)}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 3 & 2 \\ 0 & 1 & 2 & 3 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \xrightarrow{\substack{\text{第1行}-\text{第3行}\times 3 \\ \text{第2行}-\text{第3行}\times 2}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}.$$

よって、

$$\begin{cases} x_1 - x_4 = 0, \\ x_2 + x_4 = 0, \\ x_3 + x_4 = 0 \end{cases}$$

だから、

$$x_1 = c, \quad x_2 = -c, \quad x_3 = -c, \quad x_4 = c.$$

ただし、 $c$  は任意の定数。